

第五章 新しい備え

1 若い理事長と新体制

昭和三十三年（一九五八年）三月五日の理事会において、二九歳の藤原偉作が代表理事に就任した。亡父藤原鉤次郎の葬儀をすませた当日である。藤原偉作が父の仕事を継ぐについては、一言では言えない決心が必要であった。その若き理事長を指導して好善社の屋台骨を支えたのは北林巳之助である。

戦後の藤原家は慰廃園跡の舎宅に住んでいたが、一日として家族水いらずの静かな団らんの時を持ったことがなかった。父親の仕事がらと、人柄から、たえず訪問者があり、同居の家族がいたり、また療養所の職員の宿泊があったりして、家庭と仕事場の区別がなかったのである。実によく人が訪れ、そして食事を共にした。その度に、偉作の母つねは、接待や料理づくりに働かねばならなかった。

父親の仕事にひきずりまわされていたといっても過言ではないだろう。息子としては、父親の仕事を継ぐ気はなかったし、母親もまた、好善社の仕事は世襲でないのだから、違う道を進んでよいとかねがね言っていた。だが一方、高齢の父親は、近所の子供を集めて日曜学校を開き、また、らいを病む人たちのために日ごとに祈り、かつ、アメリカより届けられた救護物資を患者たちに届けていた。その姿を見ると、当時日本電信電話公社に勤めてはいたが、いやおうなしに、手伝わざるをえなかった。父が死亡すれば、好善社は終わるのではないかと心配も常にあった。事務的な仕事のおぼつかなくなってきた祖父にかわって、好善社の庶務、会計の仕事に代わりすることが多くなった。だが、この時点では、公社の仕事を辞めてまで、好善社に関わろうという気持ちにはなかったようだ。

しかし、ここで決定的な出来事が起こった。それは長島愛生園で伝道に取り組んでいた原田季夫牧師との出会いである。

藤原偉作は「共助」第二〇〇号（昭和四十二年六月発行）に「九年間を回顧して」という表題で、次のように述べている。

先生に初めておめにかかったのは昭和三十三年の十二月十八日、長島愛生園のクリスマスのことであった。その頃、私はまだ公社の職員で、かたわら好善社の仕事をしていた。先生が長島の対岸虫明むしあけに居をかまえられる数日前、生涯をライ伝道に打ち込んだ私の父親がなくなったのであるが、のびのびになっていた瀬戸内海にある三つのライ療養所に対する挨拶まわりと邑久光明園に教会堂を建設する仕事があつて出かけていたときのことであった。先生に接するとなにか非常にか心を強くゆすぶられた。この先生のためにならなうもいからやるんだ、といったような衝動にかられた。

原田季夫の人格に触れ、この人に賭けようとした衝動は、単に「若さ」という言葉ではかたづけられない。この衝動こそが、彼を好善社の仕事に近づけ、さらに、らいを病む人びとと深いかかわりを持たせる力になったのである。昭和三十七年四月十六日付けで、藤原偉作は好善社の支援者へ次のような挨拶状を書いている。

謹啓 葉桜の候ますます清栄のこととお悦び申し上げます。

日頃のご厚情に対し深く感謝いたしております。

さて私こと日本電信電話公社に十余年勤続してまいりましたが、このたび四月十六日をおちまして辞職しこれと平行して奉仕してまいりました好善社のはたらきに専心することになりましたのでご挨拶かたがたお知らせいたします。

好善社は明治十年にキリスト教新教の精神により創立された伝道団体で以来ライを病む人々に対して伝道と医療にあたってきたものでありますが（私立病院慰廃園を経営した）亡父が終生の仕事として献身していったため自然と関心をもち社員の一員として名を連ねさせていただきました。

しかし人一倍この世的な欲望と虚栄心の強い私はこの仕事に尊い意義を認めながらもさて専心することには二の足を踏んでおりました。

一体これらのおもいを断ち切って信仰の確立をめざしつつ好善社に専心できるだろうか、どうしたら一家四人の生計をたててゆけるだろうか。日本の救ライ事業も新薬プロミンの出現によりあと四、五十年といわれるではないか。

そうしているうちに昨夏三十三歳の誕生を例年にない感動をもって迎えました。

『あなたがたのうちに働きかけて、その願いを起させ、かつ実現に至らせるのは神であって、それは神の

よしとされるところだからである。すべてのことを、つぶやかず疑わないで下さい』

私は依然としてためらいながらも前に推し出さんとする力は強く働きかけてまいりました。

『まず神の国と義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう』

こうして聖句によってみちびきを受けだんだんと心の準備をせしめられ今日に至った次第でございます。

いまだ若輩ではございますが今後は全身全霊をもってライを病む愛兄弟とともに福音宣教のみわざに励んでゆく決意でありますゆえ何とぞご指導ご加禱のほどお願いいたします。

み恵が豊かにありますようにお祈り申し上げます

敬具

この挨拶状を受けとった原田牧師は、すぐに彼に手紙を書いた。

(前略)復活節の早暁、貴下をここに導き給うた我々の救主の御恩寵と御神の御摂理とを讃え、好善社の由緒ある歴史を思い、父上の御志を嗣がれる貴下の今後の御活躍に、より一層主の御栄光の顕れます様、聖前に心を注ぎ出し、切なる祈りを捧げた次第で御座居ます。御書状に記されました二つの聖句に共感を禁じ得ませんでした。(後略)

そして、「万物は、神から出で、神によって成り、神に帰するのである。栄光がとこしえに神にあるように、アーメン」(ローマー一・三六)のみことばと、旧新約皮装丁小型聖書が贈られた。

その後、昭和三十七年四月、若い理事長を助けようと、四名が入社している。その筆頭は関根文之助(現在、高千穂商科大学教授)で、総会は直ちに理事に推せん、以来、全国立療養所を巡訪し問安と文筆に力をふるう。また、小澤貞雄(日本基督教団秋田高陽教会牧師)、棟居勇(日本基督教団鹿児島教会牧師)は、東京神学大学の学生であった昭和三十五年、三十六年の夏に、あいっいで香川県の大島青松園霊交会の夏期伝道に好善社の支

援で派遣された人たちで、あと一人は藤原の妻、薔薇しきぎである。

恵光寮の開設にあたり、藤楓協会や長島愛生園との確執は土地建物の財産権にからんでくることが多いことは前述した通りだが、ここにおいて好善社は従来の定款の変更が必要ことに気づいた。明治三十八年（一九〇五年）に制定された現行の定款があまりにも好善社の実状とかけはなれていたのである。

定款変更の折に文部省はとくに現金五〇万円以上の基本財産の設定を要請していたが、それに対し、以下のような賛否両論があった。

反対論としては、「神の栄光を現はすための新教伝道であるから御心ならばいつでも全財産を御用のために投じ働かねばならない。それゆえ、あえて拘束的な基本財産を設けいつまでも残すべきではない。救ライ伝道のために消費してしまふべきだ。」

消極的賛成論としては、「精神としては反対論と同意見だが、現金五〇万円程度ならば取りあえず事業に支障もないと思うので、定款変更を機に、特に主務官庁の意向があるならば設けてもよい。」

以上、種々討議の結果大体において審議済みの定款に基本財産関係の条項を加え、文部大臣より認可されればその直後、一か月以内に現金五〇万円を銀行預金として基本財産に設定することを可決した。

「御心ならばいつでも全財産を御用のために投じて働かねばならない」

との表現はかなりおおげさと思えるが、当時、恵光寮問題とからんで好善社も財産（主として海外から与えられたものについて）の活用について、かなり神経質になっていたのである。

決定後、昭和三十四年五月十一日付けで、文部省への定款の一部変更の許可申請を提出し、翌昭和三十五年二月三十日付けで認可された。

申請書類に添えられた理由書には、変更にあたって種々の理由をあげているが、創立以来の精神ならびに事業に変わりがあったわけではない。社団法人設立当初はおもなる事業としてらい病院を經營していたため、目的の表現が多分に限定されたきらいがあるので、的確な表現にあらためるといふことと、明治三十八年の法人認可時の「好善社団」という名称は呼称しにくいいため、創立当初の「好善社」に「社団法人」を加え「社団法人 好善社」と表記するなどの件があった。

新旧の主な箇所を比較してみると、第五条において、旧定款では、

本社団ノ目的ハ左ノ施設物ノ用ニ供スル土地建物及ヒ其他ノ財産ヲ所有スルニ在リ

第一、基督教主義ノ教育ヲ施サンカ為設立スル学校

第二、慈善的病院

新定款では、第三条として次のようになっている。

この法人は、基督教新教の精神に則り、ライを病む人々に対し精神的、物質的に援護することを目的とする。

また、第四条において次のようになっている。

この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

一、伝道

二、慰問

三、ライ知識の普及並に予防運動

四、その他目的を達するために必要な事業

旧定款による好善社は財産管理の法人で、学校や病院は別組織となっていた。この条文にある「基督教主義ノ教育ヲ施サンガ為設立スル学校」というのは、明治二十七年まで関係していた啓蒙学校や上野、亀島ミッションで行なっていた夜学校のことを継続されていたのか、あるいは、好善社の事業として明治三十七年社団法人設立時に、新たに学校の設置を考えていたのか不明である。慈善的病院というのは、四八年の間経営していた私立病院、慰廃園のことである。

新定款では、キリスト教新教の精神にもとづいた団体であること、「ライを病む人々」と、対象を限定した援助活動をする団体であることを明記している。このことは今までの歴史をふまえて、今後もらいを病む人々と共にあゆむこと、伝道や慰問活動によって精神的、あるいは物質的に援助をしていくこと、一般社会に対してはらの広報宣伝をすることを、好善社が宣言したのだと言える。

2 療養所教会と共に

さて、この定款問題とは別に、新理事長のもとに開かれた理事会では、北林巳之助、宮部力の理事三名が、主に録音伝道のことを議決した。

故藤原鈞次郎葬儀に際し寄贈された香燵（御花料）の使途について討議した結果、御花料（一七二、四〇〇円）一切をもってテーブルプレコーダーによる「藤原鈞次郎記念録音伝道」を起すこと。すなわち、各国立ライ療養所内基督教新教々々に対し、各一台宛計十一台のテーブルプレコーダーを寄贈し、以後、録音テープ（録

音内容は社員の教話、教会の説教、講演会の講話等とするを回送する。

さっそく、この企画は実施された。ソニー製テープレコーダー二〇二型十一台が購入され、録音テープ第一号を録音した。内容は故藤原鈎次郎の「葬儀集録」と「藤原先生を語る」である。寄贈先は、松丘聖生会（松丘保養園）、日本新生キリスト教会（東北新生園）、聖慰主教会（栗生楽泉園）、秋津教会（多磨全生園）、神山教会（駿河療養所）、曙教会（長島愛生園）、家族教会（邑久光明園）、霊交会（大島青松園）、黎明会（菊池恵楓園）、恵生会（星塚敬愛園）、奄美教会（奄美和光園）で、すべて国立療養所内にある一一の教会であった。その後、昭和三十七年まで三八巻のテープを録音、編集して各教会に回送した。

昭和三十七年（一九六二年）好善社創立八五周年記念事業として、六月と九月に各々約一か月をかけた巡回伝道が行なわれた。光明園家族教会牧師播磨醇と好善社の仕事に専念したばかりの藤原の二人による全国療養所教会の訪問伝道で、六月には西日本を、九月には東日本をまわった。いずれも途中、キリスト教主義学校約二〇校をたずね、らしいの啓蒙と療養所教会を紹介して、らしい伝道（註・当時はこのような言葉を使った）に対する理解と支持を求めて歩いた。この訪問の目的は、播磨牧師による伝道と共に、教会の実状を知り、深い交わりをもつためであった。一三の教会での、数多くの懇談のなかで、恵生会（星塚敬愛園）から、はからずも次のような提案があった。

「好善社は諸教会の教職者を集めて会合をしたいというようだが、それより、各教会の現状を考えて、全療養所教会の療養者の中から指導者を養成、講習するための会合が急務である。これについては好善社において計画し、実施にあたっては、交通費等経済的援助を願いたい。」

この件を受けて、藤原偉作は七月七日、理事会を招集した。そして、好善社が労をとるのに充分意義のあるこ

ととして可決された（このとき、すでに長島聖書学舎は発足していた）。

このようにして急速に計画が形をなし、昭和三十七年（一九六二年）十一月二十四日から三十日までの一週間、長島にある邑久光明園の家族教会で開催されたのが、「全国ライ療養所キリスト教会代表者会議」であった（口絵⑩）。療養所のキリスト者たちは、各園に教会があることは互いに聞き知ってはいるものの、顔を合わせたことがない。好善社を中心に放射線的に結びつき、個々の教会間の横のつながりはなかったので、各教会の代表者が直接集まって交流する要望が出されたのである。また、光明園家族教会や、恵楓園の黎明会（註・現在は、日本聖公会黎明教会とよんでいる）からは、各教会の様子を知らせあう新聞の発行の要望があった。この新聞は「ライ園教会新聞」として同年十一月二十日に第一号が発刊された。

代表者会議開催と新聞の発刊は、全く時を得た要望であった。療養所は、医学の面でも経済的にも社会的にも転換期を迎えており、患者の社会復帰問題や、療養所の再編成が叫ばれていた。それぞれ、立場は異なっているが、いかにキリストのために生けるあかしをたてていくかの問題をかかえていた。とにかく遠くへだてられていた教会が、顔と顔を合わせることが大切であった。互いにキリストのからだであることを、出会ってたしかめ、祈ることから、また、他教会の話に耳をかたむけることから、連帯する療養所教会が生まれようとしていた。

そして、第一回の代表者会議は「療養所教会の交り」という主題で、光明園家族教会と長島曙教会の連名で案内状が出された。これは画期的なことであった。このころ、まだ患者が旅行することとはめったになかった。療養者たちは、偏見の目に打ち勝ち、不安を乗り越えて長い旅の末に瀬戸内海の一小島に集まって来たのだった。なにしろ岡山から長島愛生園へ行くバスで患者が下ろされたという事件もあった当時のことで、偏見の目のきびしい時代であった。

「ライ園のキリスト者」第三号（発行 好善社）にこの一週間の模様がのせられている。

「第一回全国ライ療養所キリスト教会 代表者会議ひらかる」

日本のライ園に教会が芽生えたのは今から五十三年前である。その間祈りのうちに、文通で、或いは録音テープで信仰の交りが続けて来たが、いつの日か顔と顔を合せ互いに語り祈りあう日が来ることを信じてきた。このたび主のみ恵みと好善社をはじめ家族教会、曙教会の愛の労によってこの会議が開かれたことはまことに感謝である。（恵生会・南 幸男）

以下、記者による報告記事を抜粋する。

二四日（土）午後九教会代表二十六名が勢揃い、みんな初対面だが百年の知己のようにあいさつをかわした。

夜六時、播磨牧師の開会礼拝説教をもつて会議の第一頁が開かれ、終つて各教会代表の自己紹介。

二五日（日）家族教会の聖日礼拝に出席、午後も原田牧師により「聖書と教会」と題して講演をうかがい、そのあと質疑応答、夜からいよいよ各代表の懇談にはいつた。

二六日（月）朝九時、昨夜にひきつゞいて懇談会がはじまる。第一に求道者をいかに指導するか、献金の問題、病室訪問等々熱心な討議がなされ夜九時過ぎ終了。

二七日（火）関西学院大学神学部長松村克己先生を迎え世界教会の動きについて午前午後には渡り三時間の講演をうかがい質疑応答。

夜の懇談会には、ひるのテーマが生かされ教会の一致について語りあい無教会から聖公会までの各代表者が会議の雰囲気のうちよりライ園教会が主にあつて一つであるよろこびを感じとることができ感謝であつた。

二八日（水）午前中は原田先生をはじめ長島聖書学舎学生八名と懇談この機会をとおし深く学舎を理解することができた。

午後一時から遠来の米国ライ伝道会社 A L M のトッド牧師と懇談、最後に南氏がたち比島へ向う同牧師に「世界ライ園キリスト教会代表者会議がひらかれるよう祈っている」とメッセージを託した。

夜、聖慰主教会司祭松村栄先生を迎え立証祈禱会をまもつた。

二九日（木）本会議行事のクライマックス——長島聖書学舎献堂式に出席するため、一同船で愛生園へ。午後一時、来賓約三十名、教会員約二百名が出席、藤原理事長の献堂の辞、原田牧師の式辞、祈禱ついで来賓のあいさつと致しゆくかつ盛大に行われ一同聖霊にみたされ感激深い式であつた。

夜の曙教会歓迎会もほんとうになごやかな一時であつた。

三十日（金）正午、ついに閉会礼拝をむかえる。小倉牧師の説教——藤原理事長の閉会の辞——「また逢う日まで」を讚美しながらみんな胸をしめつけられるおもいだつた。

こうして天的な喜びに満ちた黄金の一週間はまたく間に過ぎ去つた。別れはつらい。だが、わたしたちがいただいた背負いきれぬ恵を一刻も速く、待っている兄弟姉妹に伝えねば……わたしたちは、再会を誓い互に旅の平穩を祈りつゝ南へ北へと島を去つていつた。

この会議の記録は終了六か月後に発行されたが、その冒頭に編纂者、橘美代志の言葉がある。

長島に於て開催された全国ライ療養所キリスト教会代表者会議に就ては、その後二、三の教会機関誌に報告や感想が発表された。それらの大凡は、「世紀の会議。全国ライ療養所キリスト教会代表者会議ひらかる。——天的な喜びに満ちた一週間——」（「ライ園のキリスト者」第三号）「ライ園創立以来の歴史的な会議」

〔基督教新報〕第三三三八号）「種々信仰系統の違った者、教会組織の異ったものが困難な旅行を克服して瀬戸内海の辺隔の小島に集い来たという一事においても大きな意義があった。こういう事は、らい療養所が始って以来最初の歴史的出来事であった」〔あけぼの〕第一二二号）等のように、この会議が所謂歴史的にみて初めてのものであったことに先ず注目し感激を表明した。

まさにそれらは当たっている。しかし問題は、ここにその第一歩を印した全国療養所教会のエキニメニカルな運動をどのように各個教会の中に形造り、発展させてゆくかと言うことにあり、そこにわれわれの関心が向けられねばならない。

即ち、互にそれぞれの教会の伝統や立場を無視することなく、かと言って折衷や妥協でもなく、イエス・キリストの教会はそれぞれの教派的な教会よりもさらにひろいものであることを認め、自己の立場をはじめから廃棄することなく、互いに心を聞いて語り、たえず聖書にかえり、聖書にてらして自己の立場をいつも批判的に検討し、より深く広い教会をこの世に実現してゆくように努めるといふことは、かつてなかった程に現今の療養所教会に要望されるどころだからである。

そこには最早や療養所内の一教会といった孤立的な態度や考え方があつてはならない。むしろ社会に連なる療養所の中の教会にふさわしい態度、言いかえるならば、全療養所教會的——全世界教會的——視野に立った教会が要求される。

この会議の実現は、その後の好善社の関わりの姿勢に示唆を与えたばかりでなく、諸教会を大いに刺激した。まだ献金を実施していなかった教会が月定献金を始めたり、週報や月報も発行され、相互に交換されるようになった。療養所の門を出ることにためらいを感じていた当時であつたが、訪ねあうようになった。ここで翌年の昭

和三十八年十月十一日発行「らい園教会新聞」第四号の「時のことば」を掲げておく。

好善社は広報宣伝のために「ライ伝道の」と自称する。しかし、わたしたちは決してそんな小さな視野で働いていない▼療養所教会と交われれば交わるほどそこには数知れない多くの宝を見出し速く社会へ掘り出さねばと心がはやる。それは宣教二百年に前進する日本の基督教伝道に大きな役割りを果たすと信じるからだ▼社会の教会は永遠の拡大を求めて進んでいる——それが使命だ。しかし療養所教会は逆である。日本のライはあと五十年と専門の医師が診断するなら、教会の活動はあと三十年——消えてしまうのが使命である▼ほとんどの社会の教会は療養所教会を知らない。いちど訪れたぐらいの人々では感激と同情の交わりから一歩も内へはいれない。じっくり交わり、そこに生きて働らく信仰を社会に引き出してもらいたい▼療養所のキリスト者も昔ながらのからに閉じこもっている人が多い。「いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる」と雄々しく証しながら、その喜びをライゆえに特殊とし一人だけの、療養所だけのものにしてよいだろうか▼ライ療養所教会は神から期限つきで事業を請負っている——タラントを託されている。こんな条件のもとに福音にたずさわっている教会は世に類のないことである。だから、もう期限は近い、とあえて警告したい▼療養所教会はやがてわたしたちが立てられたときと同じように静かに姿を消すことだろう。そしてわたしたちみんながしたことは形に残らないだろう。だがそのとき日本の社会に塩のようにとけ込んで生きていなければならない▼療園のなかに自分を見出そう。更に日本の社会に今歩んでいる我教会の姿を見出そう。和解の福音が社会との間垣をとりのぞいてくれるから（筆者・藤原偉作）。

ひきつづいて、第二回の会議は、昭和三十九年（一九六四年）十月三十一日から十一月六日まで、長島曙教会

を会場にして開催された。「療養所教会の交わりと使命」がその主題であった。「らい園教会新聞」第八号は次のように報告している。

三十一日午後、出席者二十一名が揃った。各代表は再会を喜びあい、誰かれの安否を問うのに忙しく、第一回会議以来の交わりの深まりを示す情景が見うけられた。

夜の開会礼拝をもって多彩なプログラムの幕が開かれ、翌一日と三日の二回にわたって、松村克己先生が「今日の教会の中心問題としての教会論」と題して講演をされた。先生は、今日の教会は「世にある教会」として考えねばならぬことを述べられ、一九六四年夏にアルゼンチンで開かれた世界学生キリスト者連盟会議での聖日礼拝の持ち方をもとにして、聖餐・献金の問題等を語られた。

また四日には、佐治良三先生（註・日本基督教団和泉教会牧師）の「瀨園教会の建設と使命」と題する講演をうかがった。先生は、伝道に対する教会の使命を説かれ、外部教会へのあかし、文書伝道、さらに社会復帰による伝道の道を開いてゆくべきことを力強く語られた。

講演の間を縫って行われた懇談は、各教会の現況報告をもって始められ、五回を重ねた。主題の「交わりと使命」については、あと一〇一五年位でその宣教活動が決定される療養所教会は、何を遺産として残すかという観点から話が進められ、各教会が自主独立を目ざしながら、外部教会、友園教会との交わりの中であかしをしてゆく等、それぞれの使命感が語られ、さらによいものを見出すべく熱心な話し合いがなされた。その他、支援団体との関係、教会間の交流にとまなう経済面の問題、会議の性格や今後の問題もとりあげられた。

このほかに、聖書学会生との懇談、家族教会訪問、立証会等により交わりが深められ、またキリシタン殉

教遺跡（註・明治二年浦上四番崩れで流刑されたときの岡山藩の收容場所）のある鶴島を訪ねてこの殉教が明治四年であることに驚き、一同厳肅な思いにうたれるひとときもあった。

こうして遂に六日午後の閉会礼拝を迎え、藤原理事長、一条兄の挨拶により、一週間の恵みのかずかずを確かめ、使命への思いを堅くされた。

第一回と同様に今回も決議されたものはなかったが、各代表が受けとめたものは大きかった。これらの賜ものは、各教会に帰った代表を通して生かされ具体的な活動となって現われることであろう。

今回も、北は青森、南は奄美大島から参加した一一教会代表は、ともに礼拝を守り、講演に耳をかたむけ、懇談を重ね、「今後いかに歩むべきか」を各々の立場で示され、主にあつて一つであるとの思いを強くした。

第三回会議は第二回開催から七年後の昭和四十六年（一九七一年）四月三十日から五月五日にかけて行なわれた。七年間の変化は、教会員の老齢化と減少、そして外部教会との信仰による交流が活発になりつつあることであつた。「交わりと伝道」という主題で、星塚敬愛園の恵生会が主催して行なわれた。

3 原田季夫に賭ける

昭和三十三年（一九五八年）三月のこと、原田季夫牧師は夫人をともなつて、長島（岡山県）の対岸に住居を構えた。この地に住居を定めるについては、彼のなみなみならぬ、決意があつた。彼は若き日の神への誓いを果たすために、長島愛生園の伝道をめざしてやってきたのだ。浦和高校時代、彼は自分が「らい」ではないかと疑

い、悶々とした苦悩の日々を過ごした。その疑惑はやがて晴れたが、このような苦悩を背負っている人たちのことを思わずにはいられた。らいではなかったことの感謝の祈りは、いつしか、らいを病む人たちに対する伝道への誓いとなっていった。

ここで、原田季夫の生い立ちを述べてみよう。彼は明治四十一年（一九〇八年）二月二十日、神戸で生まれ、小・中学時代を神戸で過ごした。大正十三年四月、浦和高等学校文科乙類へ入学。この時、三沢梯之助牧師より洗礼を受けた。らいの疑惑に悩んだのはこのときである。その後、東京帝国大学経済学部を経て、昭和七年四月に東京代々木初台基督教会の補教師に就任、昭和九年に早苗夫人と結婚、日本メソジスト教会の長老教職の按手礼を受け、東京聖書学校の前身の学校講師に就任した。そしてさらに伝道者として研さんを積むため、青山学院神学部研究科、日本基督教団立神学校、東京帝国大学倫理学科でも研究。昭和二十一年九月には、日本基督教団調布教会牧師になり、伝道のかたわら、東京聖書学校で教鞭をとった。しかし、彼は若き日の誓いを片時も忘れたことはなく、ついに昭和三十三年三月、すべての職をなげうって、愛生園の対岸虫明にきたのである。すでに彼は五〇歳になっていた。実に三〇年もの長い間、その日にそなえて、修養と研さんを重ねていたのである。

同年十二月、藤原はこの原田に会い、この人に賭ける決意をした。そして、好善社が原田の計画に全面的に協力支援を決定するまでのことを、彼は次のように書いている。

その思いは隣園の家族教会献堂まで一年の間じっと心の中に秘め続けた。やがて翌年十二月に献堂式が終ると、はたして帰京した私を追いかけるように曙教会の小倉牧師から「原田先生の宿望に特別な配慮と援助を」としたためられた手紙が舞い込み、これを機にその宿望である長島聖書学舎建設へと一気に乗り出したのである。

思いこんだらなにがなんでもという私の気性は異常につっ走った。体ばかりが前にのめって建設理由の説明が不十分なために、最初にこのことが提出された昭和三十五年七月の理事会では「とにかくその学校を始めてくれなければ……」という事で保留とされてしまう一幕もあったが、翌八月の理事会では可決され、十一月には臨時社員総会を招集してついに原田先生を全面的に支援して長島聖書学舎を建設するという決議がなされたのである。それは総会で初めてお目にかかった好善社の社員が先生の人格と信仰にすべてを賭けた決議であった。その時先生は一同を前にして「神様はあと二十年の間私をお用いくださると信じています」と断言し私たちはそのことを素直に信仰をもって受けとめたのである。私たちはそうするより仕方がなかった。なぜならば事業的に考えて、年々日本の患者数はわずかず減少し、やがて半世紀後には終焉を考えられる昨今のらい療養所の諸状況から判断して、多額の費用を要する学校建設に投資するということはまったく成立しないし、「二十年」という先生のお言葉にもなんの保証もなかったからである。ある理事（註・北林巳之助）はそのあとで「たとえ第一期生が卒業する三年間で終わってもそれでよい」ともらした（共助）第二〇〇号、昭和四十二年六月刊所収「九年間を回顧して」。

好善社が、原田を支援するについて、種々のためらいがなかったわけではない。もし原田に万一のことがあつたらどうするか、好善社は日本や米国からの献金だけでなりたっているのに、頓挫してしまつたらどうするのか、などの議論がなされた。しかし、最後に好善社をしてたしためたものは、原田の人格であり、「信仰とは、望んでいることがらを確信し、まだ見えていない事実を確認することである」との聖言であった。昭和三十五年八月二日、好善社理事会は正式に原田季夫と長島聖書学舎に経済援助を行なうことと、校舎の建築を決議したのである。さて、この学舎開設に当たって原田の目的としていたことはなんであろうか。昭和三十五年七月六日付けで、

好善社にあてた手紙で、彼は次のように述べている。

殊に又、聖書学舎の件について深く御心におとめ下さり、色々と具体的な配慮を賜り、理事会、総会へ本問題を提出することをお考え下さっていることを拝承致し、感謝に堪えず、三年間の準備期間の後に、神がこの企てを実現に到らしめる為門戸を開き給うことを覚え、新たな勇氣を与えられおる次第であります。

この一両日色々と祈り考えしめられており、七月十七日御来駕の砌までに、尚よく具体案を練りまとめて、御報告申し上げ度いと存じますが、輪廓的に要点のみ予め記させて頂きます。

(一)設備、「基督教教育会館」の名で百万円程度の教室二(中央のしきりを排して合併教室ともなす)図書室(小人数の研究会の為にも用いる)教師室の四つ位のまとまりのある建物一棟を与えられ聖書学舎の為と高校生の信仰と教養の指導の両目的のため使用し度し。

(二)運営、この二年余、教会に於ける秩序だった聖書講義と英語聖書研究会を続けて来ましたが、その出席者の中に、信仰のしっかりした伝道に熱意を持ちかかなりの学究心を持った者が数名あり、小生はこれらの者を第一期生の中核となり得るものと目星をつけております。又高校生明星会の中心になっていた光明園より来ている一兄弟(年齢は三十歳)も、恐らく来年卒業と共に入学致すでありましょうし、同園の橋(津島)兄よりも聴講希望の申し出があり、小生は来年四月の開校を目指しておりました。

教師については、不肖小生が、今後の生涯の全力を傾けて主任の役を果し度く、適当な科目を定めて、播磨牧師や小倉牧師の協力を願う他、一年に一、二回集中講義に来て頂ける専門家のことを考えております。予定より少し遅れましたが、小生の伝道神学論文(註・『文化と福音』)も今夏は間違いなく完成致すと存じますので、今年中に出版し、本当に小生共の志を理解協力頂ける優れた人を得るよすがと致し度いと存じ

ます。

(三) 対園当局関係は、園長先生に以前一応志のあるところをお話し申し上げた程度で具体的成案が出来れば今回貴下御来園の砌、御一緒に御面談申し上げる機会が与えられれば幸いに存じます。(中略)

(四) 対全国教会関係、小生は外的な政治的なことより内的倫理的なことに関心を持ち、その上檜舞台に立つと氣おくれがする臆病な性格も手伝って、マス・コミュニケーションとは甚だ縁の遠い存在であり、全国の教会に理解を求めることは今迄のところ殆んど出来ておらないと申し上げねばなりません。然しパウロの申した様な「人に知られざる者の如くなれど人に知られ」という行き方もあろうと存じ忍耐と誠実を以て、人の心に訴えて行き度いと念願しております。将来、よき理解と協力を得ることに努めるということが、本項に對する回答であります。

彼が目的としたことは、「深い福音的信仰と高い宗教的良識をそなえて、神と人とに仕えゆく人材を養成すること」であった。これは、らい療養所内の伝道は、外部の健康者によるものより、同じ病いを負う者によってなされるほうがゆきとどいたものとなる、という考えに基づくものであった。

好善社は彼の計画を支援し、彼と共にすこしずつ具体化していったが、発足までには試練があった。それは、開校をまぢかにひかえた昭和三十六年二月、学舎側の配慮不足から長島愛生園自治会との関係が円滑さを欠き、一時は開設が危ぶまれたことである。国立療養所の中に私立学校を建てるというある意味での冒険であった。原田、好善社、曙教会、自治会、園当局の間で何度となく話し合いがなされ、やっと「曙教会の宗教活動の一環として行う」という了解で開校することになった。したがって、当時は、あまりおおっぴらに「長島聖書学舎」とは呼べなかった。

4 長島聖書学舎

原田の呼びかけに応じたものは園内から六名、他園から三名であった。療養所内での開設にはいろいろ制約があったが、ともかく、昭和三十六年（一九六一年）四月、愛生園内の曙教会の一室をかりて発足した。その時の模様は原田の昭和三十六年四月十一日付けの手紙で紹介する。

（前略）四月十五日のわびしい聖書学舎の誕生、それでもそこに本当にキリストの足跡に従おうとする真摯な決意と燃ゆる祈りがあれば、それでよいではないかと自らに語り聞かせています。多大の好意と援助をおよせ下さる好善社として定めし意に満たぬところもおありのことと恐察致しますが何卒御海容下さい。

然し、愛生教会の選り抜きの六名の献身者を与えられたことは、実に大きな感謝であり、この第一期生に魂を打ち込んだ教育をさせて頂き度いとこの願いに燃えており、この意味では洵によき出発であります。（後略）

このようにして三年制の長島聖書学舎は誕生した。原田が校長として教育面、好善社は財政面、曙教会は生活面を分担して、三者の協力により運営されていった。曙教会は単立のプロテスタント教会で、学舎運営にあたって園内の渉外の責任を担い、学生の日常生活においては信仰面からの指導にあたったのである。教師陣としては、播磨醇、小倉兼治（曙教会牧師）が協力した。

いよいよ授業が始まり、今度は独立した校舎建築に取りかかることになった。ところが、あてにしていたAL

Mからの援助が来ないというアクセシビリティが起こった。藤原偉作はこの件につき、「言語や物の考え方の異なる海の彼方へ、愚かにも私が、うまくいってない面などを詳細に報告しすぎたためだと思われる」と反省している。ともかくも一年間にわたる要請の結果、資金は獲得できた。

昭和三十七年十一月二十九日、ALMよりD・トッド牧師をむかえて献堂式が行なわれた。

この式が、隣の邑久光明園で行なわれていた「全国ライ療養所キリスト教会代表者会議」のプログラムに組みこまれて行なわれたことは、長島聖書学舎の本格的な活動を全国療園に披露することとなった。建物は唱教会に付設した形で、二階が教室、階下が図書室、横に玄関と応接室を備えている。この校舎に好善社は一五〇万円の建築費を投じた。

ここで、学生について述べよう。学生と一口にいつても健康者のそれではない。みな共通して「らい」という重荷を負い、なかには盲人の学生もいた。盲人の場合は、点字タイプ、録音機をたずさえての授業であり、他に教材の点訳も必要であった。病者であるうえに、平均年齢は四〇歳を越えていたのだから、初めて学ぶ英語、ヘブル語、ギリシア語の学習にいたっては並大抵のものではなかった。「ライ園のキリスト者」第四号（昭和三十八年六月）のなかに学生生活の紹介がある。

「聖書学舎の一日」

学生の一日は祈りから始まる。

教会から五十メートルほど離れた手影島をK君は自分の祈りの場所として占領してしまったようだ。もともこの小島は教会のあるみさきとつらなっていたが、波と風化とによって分断され、海中に取り残されたのだろう。潮がひくと陸棚のような浅瀬が、小島に通じるので、K君はゆうゆうと渡ってゆけるのだ。

ところでK君が手影島でさんびかを歌い祈りのひとときを過ごして帰ってくるころ、原田先生は長島の対岸虫明の自宅から船着場へそこから愛生園の登庁船に乗って十五分、——こうして原田先生は雨の日も風の日も五年間通ってきておられるのである。そして八時半には教会の控室にはいり、そして夕方五時の船で帰られるまでは、長島の住人となられるわけだ。長島が作為のない島であるように先生もまた全く作為のないお人柄である。学生の方が時によると先生よりも世故にたけてひとくさりの理屈をこねるので先生も楽ではないだろう。しかし、先生の方のひたひたのいわは、学生の小理屈のゆえではない。それはひとすじに神に仕えてこられた聖徒の年輪であるのだ。

学舎の始業は九時半である。それは学生がプロミン注射や、その他の治療に時間をとられるのでその事を考慮にいった時間であるがそれでも急がないと九時半までに治療をすますことはむずかしい。ラッシュアワーはなにも通勤電車のみとは限らない。プロミン注射のラッシュアワーにまぎこまれてきたまえ。気ばかりいらいらして順番ののろさに舌うちする破目にもなる。学生の中でおとなの風格あるHさんは茫洋としているので、いつもラッシュアワーにあっているらしい。九時半の始業時間にはすべりこむようにして、かろうじて間にあっている。それでHさんには「すべり込み大明神」のニックネームがある。

授業は、午前は九時半から十一時半まで、午後は一時から二時半までの一日三時間半である。しかし若い播磨先生が担当するギリシャ語の時間は、よく時間を超過し、二時半の終業が三時になり、ついには三時半になることもざらである。先生の若さに押しまくられて、ただでさえ年寄り学生には負担の重いギリシャ語を長時間にわたって積みこまれると、われわれの頭はボーッととして、いつしか英語とギリシャ語がゴチャゴチャに同居してすもうを取り始める。そうなると先生の方で根負けなさるのだらう、今日はこれまで、と言

うことになってわれわれの頭脳もようやく正常の位置にもどる。

どうやら昼食の時間がきたようだ。食籠の音で腹の虫が眠りから覚めて、あくびをし始めたところで療養所の食事風景をお話ししよう。

中央炊事場で調理したものを自動車で配食場に運び、配食場で各舎別の食籠に盛り分け、それを朝は七時半に、昼は正午に、晩は四時に、配食場からそれぞれ舎に持ち帰って、さらに個人別の茶碗に分配していた、だくといった具合である。

午後の授業も終って放課後ともなれば階下の図書室においてゆきおもおもいの本をさがしては自習する。窓をあけると松の枝越しに瀬戸内の穏やかな海も見えて、あたかも観光地の旅館のヴェランダに腰掛けている大気分も十分に味える。心は豊か、気分は爽快したがって頭もぐんとよくなるだろう。

図書室の隣は応接室になっている。教師会などここで行なわれるが、先生方が寄り合って話し合われると、ひやひやさせられる。話し合いの結果はきまって、訪問伝道の実施とか、説教の実習とか預言者についてのレポートを書かされるとか、……まったく緊張せざるをえない。時には学生は勤勉だから試験を免除しようとか、休暇を与えようとか、思いやりのある話し合いがなされてもいように思うのだが、世はままたらぬもので、いっばしの理屈をこねる年寄り学生でも、泣く子（教師）と地頭（教師会）には勝てない仕組みになっているらしい。

それでも学生は、勉強に追いまわされているうちが花なのかもしれない。放課後、海風に吹かれながら教室内外の清掃に汗をかき、ほうきを手にするとき、しみじみとそう思うのだ。今、私たちは一日一日の学びを、さながら、たなごころでいとむごくとくに大切にしている。三十も半ばを越した年齢で、こうして学び

得るしあわせは、ことばに尽くせないものがあるから、療養生活も二十年余を経てともすれば無気力になり、怠惰に流れやすい身心に新なる確信と生命への喜びとを注入されてひたすらキリストに従いたいと念じ努める喜び——年齢のこともすっかり忘れてしまう。私たちの人生はこれからののだ。そう思うと、小学生のようにほうきを持つ手もいそいそと軽く、つい口笛などをふるわせて出てくる始末だ。

夕食をすますと、私たちは二人一組になって長いこと礼拝に出席しない休眠会員の家庭訪問を折にふれて行う。お互いに顔なじみになり交わりを深めて静かに世間話などを語り合い、話の合い間合い間には、なぜ礼拝に出席しないのか、と教会に対して会員の持っている不満や、希望を聞き出すのである。真理を伝える宣教はやはり静かに交わりの中から進めて行きたいと思う。それにしても訪問ということは気ほねの折れるものだ。気おくれや恥ずかしさや、いやもう数えあげると、きりが無いほどの思いわずらいで頭が一ぱいになって足がすくんでしまう。しかし、人をみちびくためには、もっともっと聖書のみことばによって品性をきよめ、聖名を恥かしめない者となるだけでなく、謙虚と忍耐とに徹する修煉も、積まなければならぬと思うようになってきた。

ところで、療養所の夜は、家庭的だんらんというものが無いからふけるのが早いように思われがちだが、ラジオセンターから親子ラジオで十時まで娯楽番組や、ニュースを流すので夜がふける割にはなかなか静かにならない。親子ラジオのスイッチを切って、ラジオから解放されたいと思って床にもぐり込んで娯楽番組に耳を傾けている同室の人もあるので共同生活のペースをくずすことはやはり気になる。したがって予習復習を落着いてやることできるのは十時以後ということになる。

同室の人々の寝息をうかがいながら、スタンドのあかりに気を使いいい予習復習をしていると、いつしか

時計が十二時をうった。おや、雨だ。雨だれが静かに軒をうち夜の静寂をいよいよ深くしている。

(学生、石垣信祐)

第一期生が三年目を迎えたとき、翌春の卒業をひかえ、講義を充実させる目的で東京より二人の教師を迎えて夏期集中講義が開催された。第二期、第三期も、原田、播磨、小倉の教師陣を応援するために、キリスト教会の学者や、牧師を招き、集中講義が行なわれた。これも原田校長の熱い祈りによるところが大きい。はじめての夏期集中講義のレポートが、やはり「ライ園のキリスト者」第五号(昭和三十八年十一月発行)にあるのでここに記しておく。

夏季に入ると、よくキリスト教会において修養会が行なわれることを聞くのであるが、幸いにも好善社の配慮によって長島聖書学舎においても去る七月十五日から十八日までの四日間、関根文之助先生ならびに青山学院の新見宏先生(註・現在、日本聖書協会総主事)を迎えて、夏季集中講義が開催されたのである。このような催しはライ園にとって初めての出来事であって、これまでもライ園を訪ねる名士や学者によって一時間半かせいぜい二時間位の時局講演や、ある時は専門的な講演がなされたことはあったが、このたびのように講師が四日間も宿泊して専門的な講義が行なわれたことはかつて無い事からであった。

もどかしくさえ思えた第一期の学びもようやくにして終り、明日より開始される集中講義の会場の準備に取りかかったのであるが、この日も真夏の太陽は容赦なく朝から照りつけ、うだるような暑さであった。講義中のこのような暑さを予想してガラス窓は全部取りはずし、日の射し込む窓にはスタレを下げて暑さの緩和を計るなど、私たちは大汗をかいて会場造りに当たったのである。

いよいよ当日となって友園教会から酷暑をおかして参加した兄弟方の顔が見えた。まだ一度も言葉をかわ

したことの無い兄妹が大部分であったが、主に在るなつかしさと老齡をいとわず、不自由を克服して参加された熱心に強い励ましを覚えた。

全員、出身園と名前を書いた名札を胸に付けて着席した姿は初陣に出場した若武者のごとくであった。太刀ならぬ鉛筆を執って力いっぱい書きなぐろうと言う意気込みである。急に階下の方で階段に近づく足音がしきりとなり、一瞬シーンとした静けさがみなぎる。その静けさを破って二人の講師が案内された。

あらためて紹介されるまでもなく関根先生は好善社の理事としてライ園の伝道に深い関心をもち、新見先生は現在、多磨全生園秋津教会の専任牧師であって、いわば私たちにとって身近な先生方であり、いま現実に先生方を目の前にして「待ちに待った」という思いであった。紹介が終って関根先生の第一声が発せられた。原田先生が「暑いので上衣をおとりください」と言われて「講義をする時は上衣をとったことはないのですが……では脱がせてもらいましょう」という砕けた言葉によって張り詰めた雰囲気緩和を感じた。(日本精神史とキリスト教) 関根、「聖書の時代史」新見の講義の部分略す)

今にして思うのであるが、当時の暑さはまた格別でノートを取りながら感じる暑さは、頭がチリチリ焼きつきそうな思いであった。それもそのはず午後になると教室に掛けられた温度計は連日三十二度を下らず、そのうえ隣りに腰掛けている者の肘が触れ合うほどつんでいては、いかに二台の扇風機がうなりを立て風を送っても到底その力の及ぶところではなく、当然そこには暑さからの疲労と居眠りが伴うばかりであるが、両講師の実にさわやかな弁舌とユーモアによって、いささかも疲れを覚えぬ眠気を催さないことであった。

「暑かったがよかった」というこの言葉は、講義に出席した者の口から等しく発せられた喜びの声である。講師が情熱を傾けての講義によって、健康者と病者の隔たりは全く感じられず、ただ教える者と教えられる

者の血の通った四日間であった。一人一人が心の中に強く焼きつけられた刻印は、生涯消し去ることのできないものとなり、それはあまりにも大きかった。「見送りに行こう」と誰も言ったわけではないが、行けるころまで、姿が見えなくなるまで見送らずにはいられなかったのである。「ありがとうございました」の感謝の言葉も涙にさえぎられてかすれるのであった。

(学生、岡本広好)

二期生のときの夏期集中講義は、昭和四十年七月に行なわれたが、そのときには、新しい試みがなされた。それは聖書学舎の学生と、一般の神学生の共学である。東京神学大学をはじめ、青山学院、関西学院、西南学院の四名の神学生と共に学び、交わりをした。このときの教師は青山学院大学神学部教授の高柳伊三郎と東京告白教会牧師(日本基督教会)の渡辺信夫であった。

以上のような全学舎をあげての努力と、精魂を傾けての原田季夫の指導、播磨、小倉の祈りと実践的授業によくこたえた第一期生八名は、昭和三十九年(一九六四年)三月、無事卒業することができたのであった。

卒業式に原田校長は次のような式辞を述べた(口絵³⁷³⁸³⁹)。

卒業生諸君、天の御恵と多くの方々の御祝福の下に、第一回の卒業式が舉行されるに当り、様々な障害を乗り越えて三ヶ年の学びを完了せられた忍耐と労苦とを深く多と致します。

或者は盲目で講義の記録はすべて点字タイプライターと録音器による他はなく、或者は片目に僅か〇・〇の視力しか残されておらず、或者は結核の胸部成形手術の傷痕を身に負い、或者は不自由な手にゴムテープを以て万年筆をゆわえ付けてノートをし、或者は配偶者を失った頼辺のない女性の身を以て学びを続け、或者は三年間風の日も雨の日も山坂を越えて隣園より通学し、又或者達は半身を残して遠隔の療園より来り

学ぶ等。一人一人がよくもこの厳しい修練に堪えて学びをはたされたものと深い感謝の念を禁じ得ないのであります。

それと同時に、創設この方主任教師として共に学びにいそしみ、今茲に校長の名を以て諸君に卒業証書を授与することになりました。自分自身を顧みて、聊かの感慨なき能わぬ者であります。回顧すれば今より三十七、八年前、旧制高等学校在学当時に、自らの身が、癩ではないかという深い疑雲に包まれた経験を通して深きキリストの御恩寵に浴し、肉に死んで霊に生き、己に死んで神の為に、隣人の中に生きる道を教えられた私は、昭和五年大学卒業と共に癩伝道を志し、二年の勉学修養の後に、当時草津にあった病聖徒安倍千太郎師の主宰される聖書塾のヘルパーとして働こうという計画を樹てたのでありますが、様々な事情のためこの事は実現せず、昭和七年には安倍師も病革って召天せられたのであります。然しその念願は胸中を去らず、一般伝道に従事しおる時も自らの「切り出だされし岩と掘り出だされたる穴」を忘れず、自分がどの様にして伝道の道に導かれたかを率直に証詞し続け、いつの日にか神が初めの日の願いを叶えて下さるであらうという希望を言い表わしましたが、伝道者になって十年ほどしてから青山学院神学部研究科に学び、続いて東大文学部に再入学し、その後伝道牧会の傍ら十年間程東京聖書学校に奉職致しましたのも、今日此の日を目指しての準備に他ならなかったのであります。生来怠惰俗悪、到底神の御用を務むべくもないこの者が、三十余年世の名利に心引かれず一筋の道を歩み得たことは、ひとえに若き日に脇道へそれることなき様、しるしをおき軛を負わせ給うた賜物と深く感謝致しております。

神はミデアンの荒野に於て燃ゆる柴の中にてモーセに自らを顕わし給うたとき、「汝の足より履を脱げ、汝が立つ所は聖き地である」と仰せ給いましたが、この卒業式に当り、同じ御声を聞く様な敬肅な思を抱か

しめられるものであります。昭和三十三年三月この地に参りました時よりの事を考えるならば、ひとつ／＼が人智を越えた深い神の恵の賜物でないものはなかったのであります。即ち殆ど時を同じくしてあたかも申合わせたかの様に、関西学院大学院神学科出身の播磨牧師は、同じ長島にある光明園の療園伝道に挺身され、学舎の爲にも惜しみなき協力をして下さり、聖書学舎の母胎たる愛生園曙教会の小倉牧師も伊原顧問も、かつての日私が奉仕に参り度いと願った草津明星団の聖書学館に於て安倍千太郎先生の薫陶を受けられた方達であり、ここにも神の深い御摂理があつたことを思わざるを得ず、聖書学舎の目指す「病者による病者の伝道」M・T・O・L（註・Mission to Lepers）を百尺竿頭更に一步を進めたM・O・F・L（註・Mission of Lepers）は、この方々を中心によくの教会員の努力によつて当教会に既に立派な果が結ばれており、学舎設立のよき地盤を提供下さつたのであります。されば国立療養所の中に神学校を設けると言う様なことは、常識的に考へて到底許さるべくもないことではありますが、「教養を高め信仰を深め、療園の精神生活に寄与貢獻する」という「大乘的見地より、之を御許可下さりその成長を慈愛のまなざしを以て見守つて下さつた高島園長先生に対し、深い感謝の念を禁じ得ず、又この働きの療園生活の中に於ける意義を認めて今や陰に陽に力を貸して下さる自治会に対して、厚い謝意を表すものであり更に又、この学舎を一つの私塾的存在に終らしめず、その組織化のため強力にバックアップし、運営面一切を担当下さつて円滑な事業推進に協力を続けていて下さる好善社の御蔭を深く思うものであります。かく数えくれば、何一つとして神の御恵ならざるものはなく、私共はこの神の聖なる御事業を、私心私情の靴を以て踏みにじることのなき様に敢かに自戒し、今後一層祈りと精進を重ね、一切の栄光を神に帰し奉らねばならぬと切に願う次第であります。（後略）

またそれに応えて卒業生の言葉がある（「ライ園のキリスト者」第六号、昭和三十九年六月）。

卒業証書を手にして記念撮影のカメラの前に坐っても、卒業の実感はまだ私たちのものにならなかった。「笑って、笑って、証書を手にして嬉しそうにポーズをとって」と誰かが言っていたら良かったが、卒業式が笑い顔を見せねばならない日だとはいふことは辛いことである。

「日本のライはあと五十年と専門の医師が診断するなら、教会の活動はあと三十年——消えてしまうのが使命である」とは「ライ園教会新聞」第四号に好善社の藤原理理事長が述べられた言葉である。それにまた聖書学舎三カ年の学びにおいて、時に襲いくる倦怠感——それは平均年齢四十歳という肉体のおとろえからくる頭の回転のなぶさ、焦燥感とでもいうのであろうか——に私どもが悩まされ、ともすると学業がおろそかになるとき、原田先生が「得るために学ぶな捨てるために学べ」と、私どもがこの世的迷惑をからませて成績に一喜一憂する心を、きびしくいましめられた言葉が迫ってくる。「消えてしまふのが使命である」そして「捨てるために学ぶ」、身がひきしまつて卒業の喜びに口をほころばしている時間は私どもにはないのである。ライ園は今「老兵は消えさるのみ」と、その久しい戦陣のホコリを払って歴史の彼方にたち去るべく身仕舞をととのえている。そして終末のあわたしきは、ライ園全体に明日のない狂躁曲を奏でている。その中に出でゆいて、私どもはライ園の終末をその目で確かめ、その手でもって締め括りをしなければならぬ。まさしくそれは、消えてしまふ使命に徹する業であり、自らの身の丈に寸尺を加えるための学びであつてはならない。ライ園が日本に創設されて既に七十年が過ぎている。しかし、聖書学舎はライ園の終末近い日を選んで長島の地に建てられた。これは神の業の奥義である。終末を終末たらしめるべく、一人をも滅びの谷に失うことのないように、神は摂理のみ手をもって原田先生を動かす、好善社に働きかけ、この世的には実りのうすい、終りの業をなさしめていられるのである。私どもは今そのことをひしひしと感じる。そして終

りの業のために働き人として、寄せ集められた身の幸を思うのである。

三カ年の学びをとおして、私どもは学びの道の奥深さを知らされある意味においては、たじろぎすら覚えられている。でもたじろぎはたじろぎ、使命は使命である。卒業の前日、昼夜にわたって行われた記念説教会は、このような臆する私どもの心に決断をなさしめるための企てであったのだろう。

そしてまた卒業も間近い日、同志社大学の山崎先生（註・同大学神学部教授山崎亨）が長島に来島されて、私どものために六時間になんなんとする講義を下さったのも、ゆるぎない使命感を私どもの心に培う助けとなった。

このように私どもを導いて、今日あらしめるために好善社、全国友園教会は言うにおよばず、主に在る愛に連なつて多くの人々の援助協力が積まれて来たのである。そのことを私どもは忘れない。そしてライ園の終りを、み心に適う終りたらしめるために心していで行こうと思うのである。（卒業生、石垣信祐）

5 二〇名の卒業生

第一期生のあと、第二期生もまた八名が呼び集められた。二〇歳代から五〇歳代で、平均年齢は三八歳、邑久光明園（註・長島には長島愛生園と邑久光明園の二つの国立療養所が存在する）より自転車で通学する二人も含まれていた。第一期生のときの経験を生かして原田校長は、第二期生にも厳しい学問と信仰の訓練を与え始めていた。昭和三十九年六月、原田は「ライ園のキリスト者」第六号の紙上に、「望の門」と題する次のような一文

を載せて、一般の支援者に長島聖書学舎にかける彼の願いを訴えている。

旧約聖書ホセア書二章に「アコル（患難）の谷を望の門となす」という、印象深い言葉が記されているが、日本のライを病む人々に対する働きにおける先人のたゆみなき献身的努力、そこに展開せられた真摯な宣教活動の長い歴史のあとを受けて生まれ出た、長島聖書学舎の中より今春三年の学びを了えて第一期生八名が送り出されたことは、療園に新たな望みの門の開かれたことと神に深い感謝を捧げるものである。

戦前、療養所の門をくぐる者は、骨肉の愛情より引き離され、凡ての希望を断ち切られて入園し、苦悩の生涯をそこに埋め果てるのが、その常であったと聞かされる。戦後の驚異的な医学の進歩と画期的な社会立法の拡充は、陰惨な療養所を清潔な、日本としては一番社会保障のゆきとどいた、明るい場所に大きく転換せしめたことは喜ばしい事実であるが、表皮を去って内実に入れば、依然としてそこには幾多の悩ましき問題が伏在し、やはりそこには人生苦の吹き溜り場・アコルの谷であることも、否み難い事実である。

長島聖書学舎はまことにささやかな存在であるが、療園の中に設けられた「望の門」であるとの信仰と使命に立ち、遠大な希望に向って前進を続けるものであって、今や各園から集うて来た八名の二期生と共に、志を新たにして日夜の研鑽にいそしんでいる。曾ての日、自らの肉体に望みを失った人の多数の者は自己の才能の限界につきあたり中途にして希望をなげうつ羽目に立ってしまったのである。これに引きかえ福音は「すべて信じる者に救を得させる神の力」であり、万人に開かれた望みの門であると言うべきである。

癩はフィジカルデジーズ（肉体の病）であると共に、ソシアルデジーズ（社会的病）であると称せられるほど、今なお抜き難い偏見が残存し、この病のかもしれない出さず不幸を倍加している実状である。この除去には撓まざる啓蒙運動を必要とすることは勿論であるが、療園の中から世の人々の尊敬に値する人材が産み出さ

れる事が、より大切なことであると信ぜられる。ここに於て聖書学舎の目指す、福音による新しき人の創造、真の人間形成こそ、今後の療園に対し、寄与し得ることを確信し、勇気を新たにして遙けき道を進むものである。

道は常に険しく堅い。学舎の中で学生たちが、前へ前へとひたすら学び歩いていっているとき、原田校長の身体に病魔が忍びよっていたのである。昭和四十一年春より、腹部に鈍痛をおぼえながら授業を続けていたが、しだいに激痛にかわり、耐えられなくなった。それでも対岸の病床から講義を録音して学生に与え、祈りをもって励ました。しかし、その秋には岡山病院へ入院、療養に専念したが、翌年一月四日、天に召されたのである。らしい伝道のために三〇年の準備をし、七年間精魂を傾けつくした。享年五八歳であった。まさに「勇士は戦いの最中に倒れた」と言えよう。

第二期生の卒業証書には、今は亡き校長原田季夫の名前が記され、校長代理の播磨醇の手より卒業生に渡された。

その後、長島聖書学舎をどうするかについて、播磨、小倉の教師陣と曙教会、卒業生、および好善社の間でいろいろ協議が重ねられた。まず卒業生について、希望するものには高校卒業資格認定、日本基督教団の補教師試験への道が開かれた。

第三期には、創立当時から協力者、播磨醇牧師が校長になった。関西学院大学神学部の松村克己教授を理事長にむかえ、校長、曙教会、教師、光明園家族教会、卒業生、そして好善社の代表をもって理事会が構成され学舎運営の責任を持った。

第三期の学生は四名であったが、播磨校長を中心に、松村克己、小倉兼治、佐治良三、内藤留幸、C・H・リ

カードの教師陣ならびに、集中講義で多くの教師が応援した。故原田校長の遺言に第三期生までにしたいとあったので、この第三期生が卒業した昭和四十六年（一九七一年）三月十二日をもって、長島聖書学舎は閉校となった。

この学舎の卒業生は合計二〇名で、ある人は教団の補教師や正教師となり、療養所教会の牧師や、社会復帰して伝道者として働きに従事している。そして、このらい療養所内から起きた「らい者による伝道」は、MOL (Mission of Lepers 日本ハンセン氏病者福音宣教協会) 運動として一般社会へも働きかけている。その担い手たちの多くは、学舎卒業生たちである。

好善社は昭和三十六年（一九六一年）から昭和四十六年（一九七一年）まで、一〇年間にわたって学舎運営にあたった。援助総額は六五九万五〇〇〇円にのぼる。藤原はこの歴史にのこる学舎運営のことについて、次のように語っている。

「わたしがサラリーマン生活を捨てて好善社に飛びこんだひとつの理由は、原田先生がいたからだ。学舎の財政の責任を負うとは言ったものの、資金源がはっきりしていたわけではない。学舎の働きを訴えても、毎年の募金成績は惨たんたるものであった。しかし、今日、卒業生のめざましい活動を見ると、われわれが学舎の計画に参加できたことは主の備えであって、ただ感謝というほかはない。」

6 沖繩と本土

好善社が沖繩・宮古の地に足を踏み入れたのは、昭和四十三年（一九六八年）四月のことであった。そのときまでの好善社は、いわゆる本土の療養所教会の教会堂建設、伝道、そして、原田季夫の長島聖書学舎の運営などに全精力を注いでいたが、いよいよ長島聖書学舎も第三期生で閉校と決まると南へ向かった。

藤原は沖繩へ飛びたつていったときのことを「沖繩のふたつのライ園を訪ねて」と題して次のように書いている（「ライ園のキリスト者」第一四号昭和四十三年六月）。

沖繩出身の患者さんから本誌（ライ園のキリスト者）末頁の地図にその島が省かれていると指摘されたことがある。そこには内地と同じようにらしい療養所が二か所ありキリスト者もいる。忘れていたわけではない。日本に潜在主権があるなどといわれながらも本土より分離されて二十数年、渡航にはパスポートを必要とする内地との間には、なにかしら見えざる線がしかれているように思えてならないからであった。だからこの数年來、訪ねようと思うたびに、出かけるいじょうは、といつも特別な気構えとなぜ行くのかという意味づけに苦しみながらするすると年月を費してしまった。

しかし、近年ようやく日本復帰問題がやかましくなってきた。この島に対する関心が深まって来た。そして沖繩聖公会、沖繩基督教団は内地のそれとの合同も近いという。もはや理屈をこねているときでない。ともかく出かけよう、そして謙虚に目で見、耳で聞いて肌で感じてこようと心を決め、やっとの思いで四月八

日に羽田を発った。(後略)

そのころ好善社は、各国立療養所の新旧教会の対立、ないしは没交渉の状況をみていたので、なんとか話し合いの糸口が見出せないかと苦慮しているときでもあった。らい園という小さな社会でのこの状況は、一般療養者に、キリスト教に対する不信をいだかせていたからである。したがって、沖繩へ飛ぶまでに、さまざまな理屈や気構えが先行していた。しかし、まず相手に聴いてみようとの思いが、「とにかく出かけよう、そして謙虚に目で見、耳で聞いて肌で感じてこよう」との決意に至らせた。

藤原がはじめて沖繩に飛んだ昭和四十三年当時の琉球諸島は、戦後二三年を経ながら、なお米軍の占領下というきびしい現実のもとにおかれていた。そのため、沖繩での新しい活動を展開するにあたって、特定の療養所教会を選ぶことは考えられなかった。沖繩愛楽園にはカトリックと聖公会、宮古南静園にはカトリック、聖公会、及びプロテスタントの五教会があったが、ここでも本土の療養所と同じく教会間の交流は行なわれていなかった。好善社はまず、個々の教会との交わりから始めた。

第一回目の藤原の訪問は八日間の日程で行なわれた。那覇市の沖繩ハンセン氏病予防協会と皮膚科診療所(スキנקリニック)、そして、沖繩愛楽園。ここでは園内見学、病棟に青木恵哉(註・昭和二年、リデルにより沖繩のらい伝道に派遣された)を見舞う。本土療養所のスライド映写会、懇談、聖公会祈りの家教会の晩禱参加などを行なう。ついで、沖繩本島より海上三〇〇キロメートルをへだてた宮古島を訪ねた。この島にある南静園では、患者自治会役員との懇談、スライド映写と教会懇談が行なわれた。

スケジニールの最後は那覇のスキנקリニックの見学と懇談。このスキנקリニックは皮膚科診療となつているが、主にらい専門の診療所である。町の真ん中にらいの診療所が堂々と開かれていることは、らい予防法が施行

され隔離されている本土では考えられないことであった。当時、職員は五名で、看護婦一名、女子事務員二名と社会復帰した二名の男子が事務をとっていた。毎週一回愛楽園から医師の湊園長が出張して開診する。管理していた患者数はいわゆる在宅治療患者と呼ばれるもの五〇〇名余で、毎週診察を受けに来るものは三、四十名、その一割が新発の患者であったという。藤原はこの訪問の最終日にこの診療所で、訪れた人たちと話し合った。そのときの気持ちを次のように記している。

この午後の数時間は私の心に強く焼きついた。療養所ではなく町の中で一生懸命治療をしている人たちが、不安をこらえている新しい患者さん、身内に患者をもつ結婚適齢期の女性、そして内地のお医者さんに日本では貴重品になったというらい菌を豊富に顕微鏡で見せてもらったことなど……。心なくも「日本のらしいは終った」などと言える人は「最近では待合室もこむようになりました」というあのクリニックの実状を見てもらいたい。いまだこの南海に散在する島の中には未調査のものもあるという。琉球列島の患者の人口比は内地の二十二倍というその数字を私は肌で感じた。最初この皮膚科診療所の大きな看板を見て驚いた私であったが、もっともっと大きく掲げて島々に正しい広報を浸透させてこの病気を駆逐しなければならぬと思つた。

イースターの翌日那覇を飛びたち沖繩に別れを告げた。南海の青い海原に点々とする島かげを見ながら八日間を回想した。そしてもう一度『選ばれた島』を開いてみた。青木先生が沖繩に渡って初めてリデル女史から支援金を送られたときのことを、これは無論私の一ヵ月分の生活費として送られたものである。しかし、これからの生活は彼等（病友のこと）飽ければ我また飽き、彼等飢ゆれば我また飢ゆる生活でなければならぬ。と綴っておられるが、今後当社が日本内地で得る献金は、当面換金の不自由さはあるとしても

内地の療養所教会の働きを助けると同様、この島のらい園伝道にも用いられんことを祈ったしだいである。重熱帯の二つの療養所は、多くの色彩豊かな植物に彩られ、そこでの生活は一見のどかに見えたが、実態に触れれば触れるほど、医療の面で、患者処遇の面で、本土のそれとは著しい格差があることを知った。そして「本土はぬくぬくと自分ひとりの生活をむさぼっている」と患者の一人から言われた言葉は、好善社にとって厳しい問いかけとしてせまった。

たしかに昭和四十三年ごろは、世間一般も各療養所も本土全般にわたって、高度成長、繁栄のときであり、昭和元禄などと言われていた。しかし、この繁栄のかけに置き去りにされた琉球諸島があった。

ではどうすれば「沖繩の問題」を「本土の問題」とすることができぬのか。本土の人間が、本土の療養者が、おもしろいに出かけて行って、その地の実情に触れ、共にその苦悩にあずかろうという姿勢があるのなら、新しい道も開けてくるだろう。藤原は、沖繩の病める人たちの存在をひしひしと身を感じながら療養所教会を巡っては訴えた。しかし、これといった手ごたえを得ることはできなかった。

ではどうすればよいのか。本土療養者の関心をひくためには、本土に沖繩の療友を招くしか道はない。沖繩・宮古の療養者が、自ら全療養所を巡って、沖繩の実情を訴え、その地にある教会との交わりにはいるという計画がよい、と藤原は考えた。

計画をたて実際に彼らを本土に迎えるまでに三年かかった。その間、七回沖繩を訪れ、彼は訪問のたびに説得を続けた。昭和四十五年度には関根文之助理事をはじめ、渡辺信夫、雨宮恵（日本基督教団名瀬教会牧師）を派遣、沖繩二園において、巡回伝道や文化講演を行なった。沖繩の人たちには、青森から奄美にいたる本土療養所の歴訪など、雲をつかむような話であった。しかし、熱意はしだいに伝わっていった。気運が盛りあがるにつれ

て、愛楽園内のカトリックと聖公会の人たちとの教派を超えた話し合いから、宮古南静園も加わり、合同懇談会が実現した。こうして、沖縄五教会の交流ならびに、本土訪問計画の足がたみがすすめられた。この沖縄の状況が本土にも伝わり、迎える本土の各療養所でも、新旧両派の教会は話し合いの場を持ち、準備をととのえ始めたのである。

昭和四十六年（一九七一年）四月十一日、イースターの日に沖縄の代表五名は本土の土を踏みしめた。沖縄の本土復帰一年前の出来事である。

到着の模様を「らい園教会新聞」第三二号（昭和四十六年四月二十四日付け）の第一面は、次のように報道している。

「ついに来た沖縄五教会代表

本土の土は懐しい！と徳田団長」

【多磨三教会発】沖縄二園五教会の本土訪問代表団の一行五名、団長・徳田祐弼氏（沖縄愛楽園祈りの家教会司祭）天久佐信氏（沖縄愛楽園聖フランシスコ・ザベリオ教会会長）与那覇次郎氏（宮古南静園キリストの教会）吉村清祐氏（宮古南静園イエスの聖心教会会長）長間四郎氏（宮古南静園聖ミカエル教会会長）は、四月十一日（日）十四時十分、日本航空九〇四便で羽田国際空港に到着した。この日東京は快晴で暖かく沖縄の一行を迎えるに適わしい日和であった。一行は好善社の藤原理事長をはじめ、多磨全生園の患者自治会執行部、キリスト教三派教会、沖縄県人会、明治学院大学生らの盛んな出迎えをうけた。

徳田団長は到着第一声で「本土の土は懐しい！今朝六時半に聖餐をうけて出かけてきた。」と語った。五代表は途中好善社を訪問、午後五時半、多磨全生園に到着、平沢患者自治会会長、中石全患協事務局長を

はじめ三教会の会員約百名の歓迎をうけた。

一行五名は到着以来、四四日間にわたり青森から奄美大島までの国立私立の療養所一四か所を歴訪し、療友同士の交わりを深めたのである。

この大旅行のスケジュール、交通機関の手配は好善社が行ない、各園での日程は、教会合同の準備委員会によって進行された。この五名の代表のなかに、沖繩愛楽園患者自治会会長・天久佐信、宮古南静園患者自治会会長・与那覇次郎がいたので、教会対教会の親善にとどまらず、自治会代表を迎えるという公的なものにも発展していた。各園ともに自治会の歓迎会、教会合同の歓迎会や礼拝、祈禱会など多彩な行事が用意されていた。またその土地の名所旧跡の観光も、もてなしとしてスケジュールに組みこまれた。

この訪問旅行は単に親善交流というだけでなく、好善社が主催する講演会も開かれた。東京渋谷の山手教会ホールで、療養者が語る「沖繩講演会」と銘うったものであった。「愛楽園と青木恵哉」と題して徳田祐弼司祭が、「沖繩のライ事情」と題して天久佐信自治会会長が、それぞれ一時間余の講演を行ない、二百数十名の会衆から大きな拍手を受けた。

また、来訪者の中の沖繩二園の自治会会長らが、厚生省、国会、藤楓協会を歴訪し、本土復帰後の援助を陳情した。大島青松園では、たまたま開催中の全国ハンセン氏病患者協議会の支部長会議にオブザーバーとして参加した。このように多彩な行事を含んだ四四日間の大旅行は、幸いに一人の落伍者もなく終わり、沖繩と本土を結ぶ架橋事業は実現をみたのである。

沖繩本土復帰前のこの訪問は、単に沖繩の療養者にとって意味があっただけではなく、本土の療園教会にとっても大きな意味をもっていた。それは、彼らを迎えるために、多くの園でプロテスタント、聖公会、カトリック

教会で合同の奉仕を実現し、ここで生まれた共働が、一部の療養所ではエキュメニカルな活動の前進に役立ったようにみえる。一般社会の教会でなかなか実っていないことが、らい療養所教会のなかで、はからずも実ってきているのかもしれない。

親善使節団が沖繩に帰ったあと、好善社に数々の謝辞が送られたが、好善社としては、たんに沖繩と本土の療園の橋を架けただけである。そこを信仰の決断をもって渡った沖繩の療友と、彼らを暖かく迎えた本土の療友がいたからこそ、実現できたことなのである。

沖繩・宮古二園の教会代表の本土訪問の後、昭和四十六年（一九七一年）十一月十一日、沖繩愛楽園において、「沖繩救らいの先駆者」であり、愛楽園の礎石を築いた青木恵哉執事（一九六九年三月六日召天）の頌徳碑除幕式が挙行された。

この機会に、好善社は参加希望者を募り、本土の療友が沖繩を訪れた。大島青松園霊交会の曾我野一美、長島愛生園曙教会の今村栄一、星塚敬愛園恵生会の玉城清吉、他に宮古南静園からは、聖ミカエル教会の長間四郎、カトリック教会の吉村清佑とキリストの教会から傍聴の新里玄次の諸氏である。除幕式参列後、自治会および祈りの家教会、カトリック教会との礼拝と懇談会、沖繩の戦跡地巡りなどを行なった。

四月には沖繩から本土へ、そして、十一月には本土から沖繩への訪問が実現したのである。このときは教会の交流に重点がおかれ、これからの療養所教会での伝道のあり方、信徒の出席、教会の財政について具体的な情報交換や提案が交わされた。

そして、復帰も間近になった昭和四十七年四月、長島愛生園曙教会の今村栄一長老から、好善社に一通の手紙が届いた。それには、沖繩の本土復帰を記念して、

「長年多くの苦勞に耐えてこられた友園の方々を本土教会として暖かい心をもって迎えたいと願うのですが、その心持を表わすため、本土友園教会から募金して沖縄二園にカセットコーダーを寄贈してはどうか、その呼びかけを好善社にしてもらいたい。」とあった。

その後、録音機を沖縄へ贈ろうという運動は急速に進展し、らい療養所内にある二四の新旧教会から約一七万円が寄せられ、時を移さず、五月二十三日には、藤原がらい園教会の使者として七台の録音機をたずさえて沖縄へ飛んだ。

五月十五日に沖縄の本土復帰が実現していたので、この沖縄訪問は、復帰直後の大混乱の真ただ中で行なわれた。このとき、本土療友の心のこもったプレゼントを手にした愛楽園の患者代表・天久佐信は、心からの感謝の辞を次のように述べている。

早天に慈雨、砂漠のオアシス、混乱と昂奮の渦中にあつた全入園者ならびに教会員の復帰ショックを静めるのに最良の鎮静剤となりました。

この録音機寄贈について、好善社が提案者今村栄一に本土二四教会を代表しての挨拶の言葉の寄稿を求め、二園での贈呈式のために藤原が代読した。次のような文である。

待ちに待った沖縄の本土復帰がやっと実現しましたが、私共はなぜか素直に「おめでとうございます」とご挨拶を申上げることが、ためらわれるのです。それは、戦中、戦後から今日に至るまで、皆様が経験された苦しみと痛みに対して私共もまた共に負わねばならなかった苦痛であったということを、どれ程切実な思いで受け止めて来たかを、今、問い正されているからであります。

私共、本土友園のキリスト者は、「自分を愛するようになり、あなたの隣り人を愛せよ」との主イエス・キリストのみ言に厳しく審かれております。まことに申訳けないことではありますが、私共は永い間、皆様の苦しみや痛みを他人ごととして見過してまいりました。若しそれが私共の血を分けた肉親の苦しみであったとしますなら、私共はどれ程心を痛めたことでありましょう。沖繩療園の本土復帰が実現し皆様との今後の交りについて考えさせられる時、私共は今更のように自らの身勝手さに気付かされ重く心を閉されるのです。

しかし、同じ病を病む者として、皆様が永い間、低医療、低処遇に苦しんで来られたことを知り、一日も早く本土並みの医療と処遇を受けることが出来るようにとの願いは、私共の心からなる祈りでもありました。まだ多くの未解決な問題を持つ復帰であるとは申しまでも、とに角その目を迎えることが出来ましたことは、私共にとってほんとうに喜びでございます。

皆様の本土復帰に際して私共はどのようにお迎えすれば良いのかと祈られました。そして導かれましたのは、皆様と私共との交りが今迄よりも、より深く、より親しくされると云う事実を素直に喜び、心を暖め働かしたいということでありました。その願いと、思いを込めて、全国友園のキリスト者からのささやかな贈り物がゆるされることを心から感謝しています。

これからは、より切実な思いを持って、共に重荷を負う者としての交りを深めさせて頂きたいと願いつつ、ご挨拶と致します。(昭和四十七年五月)

以上のような沖繩と本土を結んだ働きは、これからもらいを病む人たちの交流のかけ橋となっていくことであろう。

7 カトリック教会との交わり

好善社が新しい事業に導かれるとき、いつも新しい出会いがあった。療養所カトリック教会との交わりもまた、そうであった。

好善社は、それまでプロテスタントの団体としての歴史をもって活動してきた。療養所の伝道といっても、もっぱらプロテスタントのキリスト者や教会を手がかりにした。戦後の教会堂建設、訪問伝道、代表者会議、長島聖書学舎、そしてワーク・キャンプなど、いずれもプロテスタントの教会を対象とし、また橋頭堡として彼らと共に実現したものばかりである。どの療養所にもカトリック教会があるのはよく知っていた。しかし、カトリック教会に関係してゆくことには大きなためらいがあった。この好善社のためらいをくずしたのは、カトリックの人たちであった。

昭和四十一年（一九六六年）の夏、好善社が松丘保養園（国立）で三年目のワーク・キャンプを実施していたときのことである。それまで、保養園にあるプロテスタントの教会、すなわち松丘聖生会と聖公会の聖ミカエル教会をバックにこの活動をすすめていたのであるが、そこへ同じ園内のカトリック教会の米塚尚司代表が、数人の信徒を引き連れて参加してきたのである。「同じ主を信じているのだから協力させてください」との申し出であった。彼は、明らかに一九六四年の第二バチカン公会議のエキュメニズムの姿勢をふまえていたことと思うが、ふつうは、他のグループが先に活動を起こしている場合、それがどんなによいことであっても、あとから、しか

も誘われもしないのにその中に入ってゆくことは容易なことではない。このとき、キャンプの責任者として当地にいた藤原は、「彼の信仰による勇氣にうたれ、カトリック教会こそ心を開いていることを知らされ、頭が下がる思いがした」と報告している。

このように松丘でカトリック教会との交わりに好善社が心開かれていく体験をしてから、もう一度療養所をながめてみると、療養所にはいくつかの教派の教会が分立しているが、特にプロテスタントとカトリックの教会の間には、なんの話し合いの場もなく、かえって反目しているところさえあった。このことは、いったいどんな影響を他の一般の療養者に与えていることであろうか。なんとか話し合いの場が開かれなければならない。そのためには、プロテスタントである好善社から、まずカトリック教会に交わりを求めていかなければと、その機を待っていた。

その機会は、なんと当時好善社が三年をかけてすすめていた、沖縄・宮古二園教会代表の本土訪問計画のなかから生まれてきた。その二園では、代表を本土に送り出すために、プロテスタント、聖公会、カトリックの五教会が、超教派の話し合いをかさねる努力をしていた。一方、本土の療養所では、超教派の彼らを迎えるために、各園において、やはり超教派での準備をすすめるべく、積極的にしる消極的にしる話し合いが生まれていた。

好善社は、本土療養所内のカトリック教会にも急速に接近していった。そういう表現より、接近することができたというほうが正しいかもしれない。それと、渡辺清二郎（多磨全生園カトリック愛徳会会長）との出会いである。彼は、好善社が沖縄との交流をすすめていることに強い関心を示し、沖縄二園五教会代表を招く計画の最後のつめの段階に沖縄を訪れ、沖縄の療友との打ち合わせに臨席した。すでに、最初の訪問地が多磨全生園と決まっていたので、五名の代表に安心感と励ましを与え、この計画の強力な推進力となった。彼が藤原と共に訪沖

したのは、昭和四十五年十一月二十五日で、沖縄の愛楽園聖フランシスコ・ザベリオ教会の献堂式に招かれたと
きのことであった（口絵④）。

このとき、もうひとつの好機に恵まれた。それは、藤原が那覇より名護に向かう一時間半の車中で、たまたま、
献堂式に参列される、カリタス・ジャパンの松村菅和理事長（神父）と二人きりで話す機会を与えられたこと
である。初対面にもかかわらず、松村神父は好善社の話に傾聴し、「カトリックには好善社のような団体はないか
ら、今後とも療養所カトリック教会のためにも働いてください」と言って、賛助会にも加入を申し出られた。こ
れは、好善社にとっては有力な支持であり、励ましでもあった。

沖縄の本土親善使節団は、前述したように渡辺の訪沖の翌年四月に実現した。彼らが羽田に着いたとき、渡辺
をはじめとする多磨全生園の歓迎委員が出迎えた。そして本土到着最初の多磨全生園では、ゆきとどいた配慮を
もって迎えられ、ここを振り出しに、勇躍として友園訪問の旅に出発することができた。これも渡辺清二郎の祈
りとこまやかな努力の賜物であった。その八月に、彼より次のような便りがあった。

丁度この手紙をかいている処へ宮古南静園キリストの教会の下沢伸夫氏より本土訪問の礼状と会報「あか
しびと」をお送りいただきました。なにか心暖まる思いでした。先生、すでにここにエキュメニカルの一つ
の姿が示されたのです。理屈をこえて、じかに人と人とが会うこと、対話することと、相手方の地に身をお
いてみることに、そこからたしかに新しいものが生れることを改めてしらされるのです……。

この手紙で、彼はエキュメニカルの方角と友園教会の対話交流の中に、今後の創造を見通しているのである。
その年の秋になって、藤原は追いうちをかけるように、次の新しい計画を渡辺にもちかけている。それは、青
森から宮古島までの国立、私立の全友園にあるカトリック一五教会の代表を、多磨全生園のカトリック教会に招

集して懇談を重ね、教会相互の交わりを深めようという計画である。

この計画の実現までの経過を、藤原は「共に歩んだ六年」（「いずみ」多磨全生園カトリック愛徳会発行、昭和五十年六月「故使徒ヨハネ渡辺清二郎追悼号」）のなかで次のように述べている。

すでにプロテスタント教会では、九年前に邑久光明園家族教会を会場として、その第一回を開催し、このときを契機として教会間の交流が始まり、こんにちでは非常に活発に展開されている。外的条件からして止むを得ないことであるが、渡辺さんも口ぐせのように言っていたように、教会といえども井の中の蛙となりがねない。いや、なってしまうのである。そこで療養生活も今日の状況に至ったのだから、積極的に他教会を訪ねて学ぶところを学び、励ましあい、外部依存の弊におちいっていることに気がつけばそれを脱皮し、自主性を高めていくことが必要なのである。

渡辺さんはその主旨に賛同して下さったがすぐには乗り出して下さらなかった。これはなんとも大仕事である。秋津カトリック教会を会場とするには、まず教会役員会の了解を求め、全会員を説得して理解と協力を得ることが第一で、さらに開催となれば計画の立案から、参集者のいっさいのお世話を会員の奉仕にまたねばならないからであった。しかしこれは絶対に急務であり、やり遂げられなければならないことであった。そこで、わたしは執拗にじわじわと食下りあきらめなかつた。

さて、年があらたまって二月十五日夜、わたしは再び渡辺さんと旅に出た。特急寝台はくつる号に乗って青森へ向ったのである。松丘保養園のカトリック教会には米塚尚司さんという会長がおられ、代表者会議の開催主旨に賛同しておられたから、この件を推進するために、ぜひとも話しあっていた良かったのである。

帰京されると渡辺さんは、さっそく開催のための準備に取りかかれたのであるが、それから四ヶ月たった六月十二日（月）より五日間、全国友園カトリック教会代表者会議が開かれたのである。各園から参集された信徒代表は、このとき初めて顔と顔を合わせ、ひざを交えて語りあったのであるが、その裏には渡辺さんをはじめとする開催教会の会員の並みなみならぬお骨折りがあったことを忘れてはならない。

好善社は、彼を足がかりとして計画をたてていったが、それは、彼が好善社の意図するところを充分に理解していることに甘えて、かなり無理な提案をしたのかも知れない。しかし、彼はひとたびこの提案を受け入れると、その開催のために心を砕き、教会員の理解と協力を得、また全カトリック教会の自主的な盛りあがりを支えられて、昭和四十七年（一九七二年）六月、五日間にわたる会議が多磨全生園で行なわれたのである。この会議のあいさつの中で、藤原は、このときの感激と好善社の願いを、次のように述べた。

たしかにプロテスタント教会の代表者会議にくらべて十年遅れました。ですから、今春ようやく開催の見通しがついたときに、なぜもっと早く開催できなかったものかという責めを感じたこともありました。

しかし、昨夜勢揃いされたみなさまのお顔を拝見したとき、私は伝道の書の一節をおもい起しました。

『神のなさることは、すべて時に適っている。神は、人の心をすべて見渡せる力をお与えになった。しかし、人間には神のなさることの始終を知ることができない。』

問題は早かったか遅かったかということではないと思いました。私たちは今、神によってこの場に呼び出された事は事実であります。それ故に、それぞれが療養所という社会にどのように主の僕として仕えていったらよいかを真剣に考えなければならぬと思うのであります。

さて、ここで二つの代表者会議に関係したものととして感ずることを申しあげますが、あの十年前のプロテ

スタンント代表者会議に具体的にあがらなかった言葉が、この第一回カトリック教会の会議に表われていることです。それは『老人』という言葉であります。この十年で療養所は急速に老齢化したのです。療養所は一年で一年以上の年をとっていることに注意しなければなりません。まさに終焉のときを迎えているという厳粛な現実がこの社会にあると思います。近年の新発患者の激減は喜ばしいことであり、それが原因でもあります。しかし、それを教会について深く考えてまいりますと、らい園教会は後に続く若い信徒を期待しない教会であります。このことを私たちはどのように考えたらよいでしょうか。それとも、一般社会と変らないものとして考えるべきでしょうか。ともかく、ここには普通人が忘れている終末の問題があるということだけは言えると思います。

昨夜、代表の方々が協議主題「信徒の交わり」を検討しておられたとき、南静園の吉村さんが他教派との交わりについてまで及ばねば意味がないと発言されましたが、私も同感であり、それを期待しております。

この一月二一日、多磨全生園三教会合同で開かれた祈禱一致の集会で語られたジュニエ神父様の説教の一節は忘れられません。「私たちがやがて天国に召されたとき、イエズスは果して私たちに向って、『あなたはどこの教会のなんという先生のお話を聞きましたか』とおたずねになるでしょうか。」と語られました。このお言葉の中に、私は実に深いものが秘められているように思いました。

みなさん、日本のらい事業史をよく考えてみましょう。日本のらい園はどうして生まれたか。そして、どのようにしてそこに教会が芽生えたか。明治二二年にテストウイドウ神父が復生病院を、同じく二七年に米國長老派宣教師ヤングマン女史、すなわち好善社が慰糜園を、そして二八年に英国聖公会のリデル女史が回春病院を起しました。それは病院を創設するということと同時に、らい園にキリストの種を蒔いたというこ

とでした。そしてその芽が主の恵みによって育ち、今、みなさまがそれぞれの教会を代表しておられるという事実です。やがて私たちは召されることでしょう。その時、私たちはこのらい園教会の終焉を神の前に報告しなければならぬと思うのです。私もジュニエ神父様の語られたことを信じます。他教派とのよき業をもってこの社会に仕えながら、『主に在って一つ』と神の前に第一番に報告するものは、らい園教会でありたいと思います。

会議はまず各教会の簡単な歴史の紹介に始まり、教会員の出席状況、布教、奉仕活動、献金の仕方などについて報告がなされたが「まとも」のひとつに、シロアリに蝕まれ老朽した聖堂の再建に苦闘している星塚敬愛園カトリック教会（鹿児島県鹿屋市）に支援の手をのべよう、という一項が盛られたことは、力強く立とうとするらい園教会の意気込みであった。

会議のあいまにはさまざまな催しが行りこまれていた（口絵④）。すなわち、第二日目には、白柳大司教をはじめ、野口由松、平山高明両司教を迎えてミサが行なわれたほか、成田稔、平子真の両医官と佐藤献ケースワーカーによる講演「全生園における老人対策」「一九七〇年代のらい医学」「らいの福祉状況について」があり、また沢田和夫神父の「現代に生きる信仰者」、好善社の関根文之助理事からは「日本精神史とキリスト教」と題する講演が行なわれた。

今や日本のらい療養所は終焉期を迎えていると言われているが、そうした時代に所内の教会は老齢もいとわず、小さな、なお閉ざされている社会で精いっぱい愛の実践に励もうと努力している。

この会議に、藤原は全日程陪席し、関根理事は二日間傍聴し講演を行なった。そして、療養所教会の現実として二つのことが強調されていた。ひとつは、今後更に老齢化が進み、教会員が少なくなると、少人数の教会では

カトリック教会間の交流計画のひとつが中断され、もうひとつが準備期間に入ったとき、渡辺清二郎は同年六月十一日、天に召される身となった。好善社にとって、頼もしい協力者であり援助者を失ったけれども、療養所二九教会との交わりが与えられ、共に働く場が開かれている。